

中核市における若年者のメディアへの接触、信頼度

—岡山理科大生の新聞閲読、テレビ・ラジオ視聴調査から—

木村 邦彦

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科
(2003年11月7日 受理)

1. はじめに

活字離れが言われ始めて久しく、特に若年者に顕著である。ニュースを得るのに活字に頼っていた世代には、なんとも歯がゆい。マルチメディアの時代に入って、相次ぎ登場する電子関連のメディア機器に抵抗感が強い中高年層に対して、若年層は難なく受け入れている現実が今日の活字離れにつながっているといわれている。

若い彼らは、日々新しい手段、携帯電話やインターネットからの情報を駆使してニュースに接している。必要な情報は手に入れることができ、社会の流れには遅れをとらないという。「若者は忙しいから新聞など読む時間がとれない」ともいうが、半面、テレビはしっかりと見ている。彼らには活字離れ、新聞離れにおける不便さはないし、感じようとしなないために、新聞が持つ役割の一つであるニュースの解説性を必要としないし、ジャーナリズムとしての新聞が受け持つ権力者への監視役、世論のリード役を理解しようとしなない。理解しないからニュースが持つ意味が分からない。それが将来どのような結果になるのかということを知ろうとしなない。悪循環に陥りつつあり、将来的には大きな課題だといえよう。

筆者は昨年、一昨年と講義を受け持った京都市内の私立大学における受講生を対象に新聞閲読などのメディア接触度と信頼度調査を実施、新聞などのメディアが抱える課題を指摘してきたが、今回、岡山理科大学における講義を受け持つ機会を得て、岡山市における傾向を追求してみることにした。岡山市は、全国紙の新聞社が本社を置きテレビ局のキー局、準キー局がある、いわゆる“メディア先進地域”ではないものの、全国紙新聞社が市内、または隣接して印刷施設を置くなどしている“メディア中核地域”。発展しつつある都市でもあり、それだけに、これからのメディアの動向を見る重要な要素をはらんでいるともいえよう。

先進地域の一角を占めている京都市における調査に加え、全国的な傾向を見るために日本新聞協会「新聞メディアの強化に関する委員会」における調査を利用させてもらい、この動向を検証してみたが、結果は、想像以上の新聞離れ、新聞に対する信頼度の低下が見られた。半面、これも予想をはるかに超える、テレビ視聴への傾斜が目立っていた。

2. 調査

岡山理大生を対象にした調査は、「新聞閲読、テレビ・ラジオ視聴調査」と「新聞信頼度調査」の2本立てで行った。「新聞閲読、テレビ・ラジオ視聴調査」は、筆者が担当した「情報社会論」受講生と、小林宏行講師（前社会情報学科教授）の「情報メディア論」「コミュニケーション論」の受講生を対象に今年5月から7月にかけて実施。調査を行った講義を複数受講し、回答が重複した学生については筆者の「情報社会論」における調査を使用した。また、「新聞信頼度調査」は筆者が担当する「情報社会論」受講生のみを対象に今年6月に実施した。

「新聞閲読、テレビ・ラジオ視聴調査」における3講義をまとめた調査数は、総合情報学部は回答数が291、うち有効回答数233、工学部は回答数56、うち有効回答数46、理学部は回答数138、うち有効回答数119、3学部合わせて回答数485、うち有効回答数398だった。

「新聞信頼度調査」は回答数190、うち有効回答数186だった。

一方、京都の私大生における「新聞閲読、テレビ・ラジオ視聴調査」は、2002年5月実施では回答数

40に対して有効回答数38、2001年5月実施では回答数45に対して有効回答数40。「新聞信頼度調査」(2002年6月実施)では回答数40に対して有効回答数は新聞34、テレビ・ラジオ29だった。また、日本新聞協会「新聞メディアの強化に関する委員会」における「第2回新聞の評価に関する読者調査(2001年6月実施)」はサンプル2061で回収数は1463、うち学生に比較的年齢に近い18-19歳が34、20歳代は122だった。

また、新聞においてはいわゆる「一般紙」のみを調査対象とし、スポーツ紙、業界紙は除いた。

2-1 新聞閲読時間

新聞は戦後の紙不足から回復し始めた1951年、GHQ指令による新聞紙の配給廃止などで全国紙を中心にそれまでの裏表2ページから朝刊4ページ夕刊2ページ体制となり、その後記事の増加、広告スペースの確保のために増ページを繰り返してきた。1970年代には24ページでほぼ安定したかに見えたが、その後も広告の増加や紙質の軽量化などもあって新聞社は増ページ競争を展開、現在は32ページから40ページへの時代になってきている。平均とされる32ページの新聞をじっくり読むとすれば、普段の読書ペースならば半日はかかる。見出しを見て重要だと思う記事を中心にやや熱心に拾い読みしていくとすれば3-1時間くらい、拾い読みの対象を「気になるもの」「話題になっているもの」に絞っても30分は必要だろう。せめてこの30分くらいの閲読時間が望ましいところだが、調査結果は大きくかけ離れたものとなっていた。

表1は新聞の1日平均閲読時間(平日・朝刊)を、岡山理大生、京都の私大生、新聞協会調査で比較したもののだが、岡山理大生10.2分、京都の私大生20.1分と16.0分、日本新聞協会調査で20歳代17.0分、18-19歳13.5分という結果になった。最低は望ましいと思われる30分に比べて、もっとも近い京都の私大生の2002年調査でも10分ほど不足、岡山理大生に関しては20分ものマイナスとなっていた。

新聞協会研究所(現在改組)では、1979年から97年にかけて12回にわたり「全国新聞信頼度調査」を行い、その中で、職業別などに分類して閲読程度・時間の推移を見ているが、97年の第12回調査でも学生は24.9分の閲読時間を持っている。(注1)

今回の岡山理大生の調査では特に「なぜ閲読しないのか?」などのコメントを求める項目は設けなかったものの閲読していない「言い訳」を書いている者も多く、その大半が「下宿生活のため新聞を購読していない」だった。同じ理由は京都の私大生の調査時にもあり、下宿生活が新聞離れに拍車をかけているものと思われる。しかし、両親などとの生活者でも「読む時間がない」との理由をあげている者が散見された。1970年代までは、下宿生活を送っている学生でも大半が新聞を購読していたことと比べてみると、現在の学生には、新聞を積極的に読もうとする習慣が希薄になっていると推測できる。

今回は「自宅通学か下宿か」の分布調査を行っていないが、簡単な聞き取り調査においては岡山理大生にはむしろ自宅通学者が多く、京都の私大生には下宿生活者が多かった。

岡山市と京都市を比較した場合、駅の売店の設置数などから新聞を手に入れる容易さは京都市に軍配があると思われるものの、中核市としての機能が増しつつある岡山市にも新聞を購入できるコンビニエンスストアなどの売店、書店も次第に増えている。身近に利用できる図書館も両市には大きな差はないものと思われる。一方、岡山理大生に多いと思われる自宅通学者には家庭で購読している新聞に接触する機会が多いことを考え合わせてみると、岡山理大生の新聞への関心度は低いといわざるをえない。

表1 新聞閲読時間調査

岡山理科大学				京都の私大生		日本新聞協会調査**	
(2003年調査、有効回答 398人)				2002年	2001年	(2001年、有効回答 18-19歳 34人、20歳代 122人)	
全学	総合情報学部	工学部	理学部	(有効回答 38人)	(有効回答 40人)	18-19歳	20歳代
10.2	9.9	7.2	11.7	20.1	16.0	13.5	17.0

* 1日平均、単位分

** 日本新聞協会「新聞メディアの強化に関する委員会」第2回新聞の評価に関する読者調査(2001年6月実施)。

2-2 メディア接触度

「新聞に関心が薄く、読まない大学生」だが、彼らの大半は日々の出来事にも無関心なのだろうか？

メディアへの接触度を見るために、新聞、テレビ、ラジオについての閲読、視聴時間分布を調べた結果が表2である。岡山理大生、京都の私大生ともに「新聞を全然読まない」との回答が4割近くを占めたのに対して、「テレビを見ない」との回答は岡山理大生でわずか2.4%、京都の私大生は7.3%と5.6%だった。

新聞閲読時間の分布状況から岡山理大生には「読んでも30分以下」が大半、これに比べて京都の私大生には30分以上の閲読者が比較的多かった。結果として京都の私大生の閲読時間を引き上げているものと推測される。

一方テレビの平均視聴時間は、岡山理大生151.2分に対して京都の私大生は139.7~117.7分。短い新聞閲読時間に反比例して岡山理大生のテレビ重視の生活が垣間見える。岡山理大生には1日10時間見るとの回答があり、講義に出ていない時にはテレビづけの生活を送っている様子をうかがわせた。

ラジオ聴取調査では、岡山理大生の80.1%が、また京都の私大生の75.6~65.8%が「聞かない」と回答。テレビを見る時間が長いことに反比例してラジオ離れの結果を見せている。

2-3 新聞、テレビ、ラジオの閲読・視聴傾向

「新聞を読まなくなり・ラジオを聴かない」。この傾向は、全国的な、それも年齢にさほど左右されない一般的な傾向になってきていることが、これまでもメディアなどで何度となく取り上げられてきている。

では、このような新聞離れ・活字離れの中にいる若者が、新聞を読むとするならばどの面に興味を持って読むのか？ 「ほとんど聴かない」というラジオを聴くならば何を聴くのか？ 逆に長時間にわたって見るテレビの番組とは何か？ 岡山理大生についてその傾向を見ることにした。

表2 メディア接触度調査

		0	30	60	120	180	240	300	301	平	有
		分	分	分	分	分	分	分	分	均	効
			以	31	61	121	181	241	以		回
			下	分	分	分	分	分	上		答
		(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(分)	(人)
新聞	岡山 全学	38.9	57.8	3.0	0.3	-	-	-	-	10.2	398
	岡山 総合情報学部	33.9	62.2	3.4	0.4	-	-	-	-	9.9	
	岡山 工学部	34.8	60.9	4.3	-	-	-	-	-	7.2	
	岡山 理学部	50.4	47.9	1.7	-	-	-	-	-	11.7	
	京都の私大(2002年)	36.8	44.7	15.8	2.6	-	-	-	-	20.1	38
	京都の私大(2001年)	35.6	52.5	10.0	-	2.5	-	-	-	16.0	40
テレビ	岡山 全学	2.4	9.5	13.4	26.3	25.6	11.5	6.8	4.4	151.2	410
	岡山 総合情報学部	1.6	11.0	15.1	27.8	26.1	9.0	5.3	4.1	181.8	
	岡山 工学部	2.0	6.1	4.1	22.4	32.7	16.3	10.2	6.1	152.8	
	岡山 理学部	4.3	7.8	13.8	25.0	21.6	14.7	8.6	4.3	144.3	
	京都の私大(2002年)	5.6	-	8.3	38.9	30.6	8.3	-	-	139.7	36
	京都の私大(2001年)	7.3	12.2	17.1	31.7	14.6	2.4	-	14.6	117.7	39
ラジオ	岡山 全学	80.1	11.3	4.4	3.0	0.7	0.2	0.0	0.2	10.8	433
	岡山 総合情報学部	76.2	12.3	5.8	4.2	0.8	0.4	-	0.4	6.3	
	岡山 工学部	77.3	20.5	2.3	-	-	-	-	-	5.5	
	岡山 理学部	89.1	6.2	2.3	1.6	0.8	-	-	-	14.1	
	京都の私大(2002年)	65.8	7.9	7.9	7.9	5.3	5.3	-	-	37.1	38
	京都の私大(2001年)	75.6	7.3	4.9	7.3	-	-	2.4	2.4	17.9	41

1) 新聞

表3は、読者が新聞を手にしたとき、どのような順番で、どんな面を読むのか、を尋ねた結果である。

「最初に読む面」とは、手にした時にまず見る面である。結果を見ると、すぐに目に入ることもあるだろうが圧倒的に1面が多い。次いで多いのが運動面。あとの面は1、2件あるかどうかで並ぶ。

では、このあとどういう順で紙面を見ていくのか？ 見ていく順に従って得点をつけ、分布状況をみたのが「どの順位で読む？」だ。見ていく順番が早いほど得点を高くして各面の得点を集計して紙面の人気度を探ってみたものだが、得点の偏りから、1面を見て運動面に目をやるか、社会面、国際面を見るというパターンが強いことが推測される。そのあとは、経済面、文化面、解説面、家庭面を興味に任せて見るスタイルといえようか。別の角度から、見る順位に関係なく新聞を手にしたときに見る面をすべてあげてもらって紙面の接触度を見たのが「毎日読む面」だが、結果は解説面と家庭面の比重が少し入れ替わっただけで紙面の閲読状況、興味度の流れはほぼ固まっていると思われる。

学部と比較でも、1面を見てから運動、社会、国際面を見るパターンは定着していた。工学部では社会面より国際面にやや関心が持たれているような結果となったが、工学部の「国際面を最初に読む」との回答は理学部とともにゼロ。国際面に関しては「手にすればすぐに読みたいほどではないが、新聞を見る以上は目を通しておく必要がある」との考えといえようか。社会面もほぼ同じような傾向と推測される。

結果を総合的に見れば、考えていた以上に1面への関心度の高さが目立つものだった。(補足資料参照、テレビ、ラジオの項も同様)

新聞の1面は1960年代ごろまでは「政治面」だった。政治関連の記事が主流、いわば政治関連以外の記事は重大ニュースでなければ扱わないというのが当時の傾向だった。ところが70年代になって新聞社内で「1面は総合面」との考えが生まれ、それまで「三面記事」として社会面に扱われていたものや、話題もの、さらには有名人といわれる人たちの死亡記事までも扱うようになってきた。読者にすれば、「1面を見れば世の中の大きな流れが分かる」ことになったともいえるわけで、その後「1面=総合面」が定着するにつれて2、3面をも総合面化して読者への閲読効果を高める工夫がなされてきている。

岡山理大生の調査結果は、4割近い学生が新聞閲読の習慣をもっていないものの、残り6割の「短時間でも新聞を読む」学生は、新聞の役割と必要性を認識して閲読している状況がうかがえる。同じ調査を京都の私大生を対象に実施していないため、講義における質疑などからの推測になるが、京都の私大生でも毎日、新聞を閲読する習慣を持つ6割強の学生は、同じような傾向を持っていた。これまでも何度もいわれてきたことだが、やはり新聞社側に“読ませる工夫”が必要だということだろう。

ところで、運動面が接触度も人気度も2位につけているのは、新聞には息抜きも必要との考えを持っているものと思われる。

表3 岡山理科大学における新聞の閲読傾向

全学	1面	国際面	経済面	社会面	運動面	家庭面	文化面	解説面
最初に読む面は？*①	62.0	1.7	1.7	3.9	27.9	0.6	1.7	0.6
どの順位で読む？*②	25.9	13.3	9.0	14.8	18.8	5.0	7.1	6.2
毎日読む面は？*③	20.8	14.1	10.4	14.9	16.8	7.6	8.5	6.9

*単位 %

*①最初に読む面は？・・・新聞を読む時に最初に読むと答えた紙面を1ポイントとして、各面の回答数を取り上げて集計(表4、表5のテレビはまず見る番組、ラジオは聴く番組への回答数を集計)。各面、番組の優先度を比較した。

*②どの順位で読む？・・・①の紙面で読む順位にしたがってポイントをつけてそれぞれを集計(表4、表5のテレビはよく見る番組に順位を、ラジオはよく聴く番組に順位をつけてもらった。新聞は最初に読む面が8ポイント、2位が7ポイント・・・8位1ポイント、テレビは1位9ポイント・・・9位1ポイント、ラジオは1位6ポイント・・・6位1ポイント、読んだり見たりしない紙面、番組などは0ポイント)。各面、番組の人気度を比較した。

*③毎日読む面は？・・・新聞を読むときにはいつも目をとおす紙面。回答のあった面を集計後、「読まず」を除いて各面ごとの接触度を比較した(表4、表5のテレビは見る番組への、ラジオは聴く番組への回答数をそれぞれ集計)。

この考え方は、新聞を作る側にも最近強まっており、結果として新聞社、それも全国紙、地方紙をも問わずに、運動面の拡充策につながっているようだが、制作側と読者側の求めるものが一致した“工夫”の一つといえようか。

2) テレビ

次に長時間見ることが習慣になっているテレビについて、何を見ているのか、視聴傾向を見てみたい。

テレビは登場してから50年を迎えて、「家族が団欒で見る」ものから1人1台のパーソナル化の傾向になり、下宿生活でも、必需品としての地位を占めている。

テレビは、当初から「ジャーナリズム」の一環としてより「娯楽」として受け入れられてきた背景がある。1953年2月にNHKがテレビ放送をスタートしたあと、続いて8月に民間放送の第一号となった日本テレビ放送網は、視聴者増加の手段として街頭テレビを設置、相撲や野球、力道山全盛のプロレスリングなどを放映することでPRに努めた。人々を楽しませる「娯楽としてのテレビ」を強烈に打ち出し、それとともに民間放送としてのCM効果をアピールした。

後に「報道のTBS」をキャッチフレーズにした東京放送のようにニュース報道に重点を置いた局も登場。最近では報道部を強化してニュース報道に力を入れてきているテレビ局も多くなり、夕方6時前後は各局ともにニュース番組が相次ぎ、夜の10時台はNHKとテレビ朝日系（岡山視聴圏では「瀬戸内海テレビ」）がワイドなニュース番組を放映している。しかし、ニュース番組といえども常に視聴率競争が背につきまわっているのが現状といえよう。

TBS系（岡山圏では「山陽テレビ」）も一時は夜の10時台にニュース番組を持っていたが視聴率が伸び悩み11時に移した経緯がある。昨秋には、埼玉・桶川ストーカー事件などの追及でクローズアップされていたテレビ朝日系の報道番組も中止された。視聴率がとれなかったといわれている。

視聴率以外の問題もある。ベトナム戦争時に制作された戦争に批判的なドキュメントのいくつかはアメリカ政府のクレームを受けた日本政府の意向を受けた形で放映が差し控えられた。オウム真理教事件では放映前のテープが教団関係者に見せられて坂本堤弁護士一家殺害事件の引き金になるなどの問題も発生した。テレビに“硬派”ものは根付かないのではなく、そのような状況をテレビ局が作り出しているとも言われて久しい。

1956年に評論家の大宅壮一氏に「1億総白痴化時代」と揶揄されたテレビだが、視聴率を第一に、「バラエティーやドラマ、スポーツ報道に力を入れて、それを売り物にする」という流れが、いまも脈々として続いている表れといえよう。それが、また長時間にわたり視聴するという現象を生んでいるように思われる。

表4 岡山理科大学生におけるテレビの視聴傾向

全学	ニュース	ドキュメント	トーク	スポーツ	ワイドショー	映画	ドラマ	音楽	バラエティー
最初に見る番組は？	23.0	0.3	3.6	16.4	1.6	5.2	15.4	5.6	28.9
よく見る番組の順位	15.9	5.4	8.9	11.8	7.2	9.7	12.6	13.1	15.5
毎日見る番組は？	14.0	7.7	10.2	11.0	9.4	11.2	11.4	12.3	12.9

ところで、今回の岡山理科大学生における調査（表4）を見ると、「ニュース」も見るが、「バラエティー」、それに「スポーツ」や「ドラマ」、「音楽」なども見るという、テレビ局が考える視聴者傾向を象徴する結果が表れた。

まずテレビの前に座って合わせるチャンネルは「バラエティー」と答えた学生がもっとも多かったが、「ニュース」も多い。続いて多いのが「スポーツ」と「ドラマ」。

テレビの調査でも、「よく見る番組」に順位をつけてもらって上位から配点して、いわゆる人気度を調べたが、数字の上ではわずかだが「バラエティー」と「ニュース」が逆転、さらに単純に「毎日見る番組」を尋ねた接触度調査でも「ニュース」が上回った。

「新聞はさほど読まないが、ニュースはテレビを見て知っている」との意思表示とも思えるが、見る番組に順位をつけてもらう人気度調査、「毎日見る番組」を尋ねた接触度調査で検証すると、各番組では大きな差はなくなった。かろうじて「ニュース」だけが少し突出して、意識的に見ているといえなくもないが、この差の中ではとりたてていえるほどの差ではないと思われる。

いま、若者だけでなく一般的にテレビを見る場合、面白い番組を求めて次々にチャンネルを変える“ザッピング”という現象が普通になっているといわれている。衛星放送などで番組が増えるとともにリモコンによる操作が一般化し、寝転んだままでも簡単にチャンネルを変えることができる。番組での視聴率の差が見られなくなっているのはその表れと考えるほうが妥当ではないだろうか。

岡山理大の3学部による比較でも、全学のまとめと同じように“ザッピング”の傾向が見られるが、工学、理学の2学部では「最初にチャンネルを合わせる番組」では「ニュース」をかなり引き離して「バラエティー」への偏りが見られた。

テレビを見ながらでは雑用しかできないだろう。若い人たち、それも学生が長時間テレビの前にいる現象は“思考力停止状態”に近いと推測してもさほどかけ離れているとは思えず、好ましいものとはいえない。

3) ラジオ

1958年ごろに“ながら族”ということばが流行した。「仕事をしながら」、「勉強をしながら」ラジオを聴いていた人たちのことである。逆にラジオを聞きながら仕事をしたり、勉強をしているといったほうがいいかもしれない。その後、「テレビを見ながら」という人たちも出てきたが、テレビを見ながらではほとんど何もできないだろうというのは、前の項で触れた。

1925年にスタートした日本のラジオ放送は第二次大戦中は国家の情報伝達機関としての役割を担う半面、出兵者などの安否情報を知らせてくれるものとして国民の間に定着するとともに、聴取者を拡大していった。戦後の1951年になって民間放送が始まり、相次いで各地に放送局が開局、聴取層を増やして全盛期を迎えたが、1960年ごろまでだった。1953年に放映が始まったテレビの急速な普及、そしてカラー化と衛星中継という技術革新を前に聴取時間は急激に減少に転じ、ラジオ離れになった。

1957年にFM放送が始まり、放送局もNHK、民間ともに各地で開局された。音楽番組の愛好者を軸に聴取者を取り戻したかにみえたが、その後音質の良さを誇る音楽も、衛星放送やCD、MDにお株を奪われてしまった。番組紹介の雑誌もほとんどが姿を消し、結局、小さなエリアをターゲットにした地域放送としての生き残りを図っているといえよう。

NHK放送世論調査所の国民生活時間調査では、ラジオの平日における平均聴取時間は1960年の1時間30分から、1965年には30分になったという。(注2)

同じような傾向の表れが表2である。今の学生にとって、ラジオは日々の生活では、ほとんどなくてもいいものになっており、70～80%が聞いていないとの回答をしている。

数少ない聴取している学生を対象にして、番組の人気度、接触度をまとめたのが表5だが、スイッチを入れるのはやはり今でも「音楽を聴くため」といってもよさそうな結果が出た。ほぼ2人に1人が、最初に聴く番組として「音楽」をあげ、よく聴く番組の順に得点を配した人気度の傾向を見ても、「音楽」の優位は動いていない。あとは“ザッピング”の傾向が読み取れる。「音楽」に飽きたらチャンネルを適当に、何度も回して、「ニュース」「トーク」「スポーツ」「バラエティー」と聴いていく。ここにもリモコンの普及が後押ししているのだろうが、ただ「ドキュメント」はラジオになじまないのか、この“ザッピング”からも少し距離を置かれた。

学部の比較では、「総合情報学部」「理学部」は全学のまとめとほぼ同じ流れが読み取れるが、「理学部」で

全学	ニュース	ドキュメント	トーク	スポーツ	音楽	バラエティー
最初に聴く番組は?	11.1	0.0	12.5	16.7	45.8	13.9
よく聴く番組の順位	14.7	2.7	19.7	12.5	34.2	16.0
毎日聴く番組は?	16.2	5.6	19.2	12.6	30.8	15.7

は「最初に聴く番組」で「ニュース」との回答がゼロだった。一方、「工学部」では“ザッピング”の傾向が「トーク」「バラ

エティー」に偏り、それにやや近接して「ニュース」が続く結果になっている。

3 メディアの信頼度

3-1 テレビの信頼度

若い人たちのメディアへの接触はテレビに大きく偏っていることが読み取れたが、それでは彼らはテレビの報道についてどの程度の信頼度をおいているのだろうか。

表6 岡山理科大生の最も信頼できるメディアは？

新聞	テレビ	ラジオ	本・雑誌	無効
38.2	45.2	3.7	4.3	9.7

* 単位 %

**有効回答数は186。その他には白紙や明確な回答を避けているものも含めた。

表6は岡山理大生に「最も信頼できるメディア」を、選んでもらった結果である。「新聞」38.2%、「テレビ」45.2%、「ラジオ」3.7%、「雑誌」4.3%、白紙などの無効9.7%だった。

新聞の閲読時間の短さに加えて新聞の予想以上の信頼度の低さが目立ち、半面、テレビの信頼度が予想以上に高かった。

視聴調査における「ニュース」への接触度が高い結果との相関関係があるように思われる。

一方、2002年5月に京都の私大生40人を対象に、「新聞に載っている記事はどの程度信頼するか?」「テレビ、ラジオでの放送内容をどの程度信頼するか?」という2つの設問に「信頼の%」で答えてもらったところでは、新聞79.1%、テレビ・ラジオ67.4%という結果になった。新聞では「大まかなことは信頼できるが細かなことについては、あまり信頼できない」、テレビ・ラジオで「天気予報などは信頼しているが他はあまり信頼していない」「NHKだったら信じるが民放だと結構内容が偏っている気がする」「芸能人ネタやアマチュアのコメンテーターは信頼できない」など、明確に信頼度を計れない回答も見られたが、集計ではとりあえず、はっきりしないものは回答不明として除外した結果である。有効回答数は新聞で34、テレビ・ラジオで29。「新聞のほうがやや信頼できる」とのコメントを書いているのが5件あり、こちらでは新聞の信頼度がテレビ、ラジオよりも高い傾向を見せていた。

調査では、テレビとラジオを分けていなかったが、ラジオがほとんど聴かれていない現状からテレビを対象にした回答と考えている。

テレビの“やらせ”が問題化、ワイドショーに代表されるニュースの“ショー化”などがテレビの信頼度を損ねていたが、この調査結果は、新聞においても“やらせ”、「誤報」などが相次いだことを受けて、信頼度を低下させ、逆にテレビの信頼度が増してきていることを示しているようだ。

3-2 新聞の信頼度

京都の私大生については、「3-1 テレビの信頼度」の項で触れた調査の2ヶ月後、2002年7月に、新聞だけを対象に再び信頼度を聞いてみた。設問と回答の方法を日本新聞協会の「第2回新聞の評価に関する読者調査」に合わせ「テレビ、雑誌に比べて新聞が最も信頼できるか」との質問を出して、「そう思う」「どちらともいえず」「そうは思わない」「わからない」の中から選んでもらった。どちらの調査も同じクラス。この調査での有効回答は25だったが、結果は表7のように、「最も信頼できる」は48.0%になった。「どちらともいえず」は32.0%、「そうは思わない」は16.0%、「わからない」は4.0%。

表7 新聞の信頼度調査I

		そう思う	どちらともいえず	そうは思わない	分からない
新聞が最も信頼できる	京都の私大生	48.0	32.0	16.0	4.0
	新聞協会調査	41.5	28.8	25.3	4.4

*有効回答数は、信頼度調査I、IIともに、岡山理大生(03・05調査)186、京都の私大生(02・07調査)25。日本新聞協会調査(01・06調査)の回収数1463。

この2002年5月と7月の調査を検証してみると、「テレビなどに比べると、新聞の記事の内容については高い信頼度を置く」が、かといって「新聞が最も信頼できるメディア」か、どうかについては、否定的な反応も増える結果になっている。

では、何が新聞の信頼度を低下させているのか。新聞協会では項目を立てて1999年と2001年に調査、その結果を同協会発行の「新聞研究」などで公表していることから、岡山理大生を対象にした今回の調査、昨年の京都の私大生における調査でも、この設問を利用させていただいて比較を試みた。結果が表8である。

1) 新聞の「正確性」

新聞協会、京都の私大生ともに「そう思う」が過半数を超えた。新聞協会調査で「そうは思わない」が25.1%あるものの、概して新聞記事の「正確性」を認めているといえよう。しかし、岡山理大生は、「そう思う」は19.4%で、「どちらともいえず」が45.7%、「そうは思わない」は32.3%の否定的な考えが強い。

2) 新聞の「公平性」

新聞協会調査では「そう思う」が5割を割り込み、逆に「どちらともいえず」が26.4%に増加、「そうは思わない」も「正確性」とほぼ同じ25.7%。しかし、京都の私大生は「そうは思わない」が32.0%になり「どちらともいえず」も48.0%。「そう思う」は16.0%に落ち込み不信感を見せる。岡山理大生は、「そう思う」は10.8%、逆に「そうは思わない」が63.4%まで膨れ上がり「どちらともいえず」も22.6%。「正確性」で見せた懐疑心がさらに強くなっている。

3) 新聞の「客観性」

新聞報道において、近年の傾向として「主観報道」を指向する向きも出てきているが、これまで軸をなしてきたのは「客観報道」。考え方が分かれるニュースでは両論を併記して提供、判断は読者に任せてきた。政治姿勢などを明確にする欧米などの新聞と違った日本独特の新聞のあり方だが、これをどのように見ているのかを聞いたのがこの設問。新聞協会の調査では44.0%が「そう思う」と答え、「そうは思わない」21.6%。「どちらともいえず」25.9%と肯定的な回答となった。「正確性」「公平性」との回答傾向と変わらず、新聞への信頼といえるかもしれない。

表8 新聞の信頼度調査Ⅱ

		そう思う	どちらともいえず	そうは思わない	わからない
新聞に書いてあることは正確だというイメージがある	岡山理大生	19.4	45.7	32.3	2.7
	京都の私大生	64.0	24.0	12.0	0.0
	新聞協会調査	52.9	18.3	25.1	3.7
新聞はいろいろな立場の意見を公平に取り上げている	岡山理大生	10.8	22.6	63.4	3.2
	京都の私大生	16.0	48.0	32.0	4.0
	新聞協会調査	42.1	26.4	25.7	5.8
新聞報道は客観性を保っている	岡山理大生	25.8	31.2	34.4	8.6
	京都の私大生	8.0	52.0	32.0	8.0
	新聞協会調査	44.0	25.9	21.6	8.5
新聞は事実を深く掘り下げ報道しているところに価値がある	岡山理大生	40.9	17.2	30.1	11.8
	京都の私大生	68.0	20.0	4.0	8.0
	新聞協会調査	50.7	23.4	20.3	5.6
新聞記事は興味本位に流れず品位を保っている	岡山理大生	16.1	36.0	34.4	13.4
	京都の私大生	48.0	16.0	24.0	12.0
	新聞協会調査	52.7	23.7	17.4	6.2
新聞は報道される人のプライバシーや人権に気を配っている	岡山理大生	19.9	32.8	40.9	6.5
	京都の私大生	28.0	28.0	24.0	20.0
	新聞協会調査	48.4	25.6	18.9	7.0
新聞は社会の人が知るべき情報を十分に提供している	岡山理大生	48.4	31.2	16.1	4.3
	京都の私大生	64.0	16.0	8.0	12.0
	新聞協会調査	63.0	18.6	14.4	4.0

*信頼度調査Ⅰ、Ⅱともに、単位は%。有効回答は岡山理大生(03・05調査)186人、京都の私大生(02・07調査)25人、日本新聞協会調査(01・06調査)1463人。

しかし、京都の私大生では32.0%が「そうは思わない」と回答、「どちらともいえず」も52.0%になり、半面「そう思う」は8.0%。「客観性」に疑問を投げかけていたが、岡山理大生では「そう思う」が25.8%あり、「正確性」「公平性」に比べてむしろ好意的な結果といえようか。

4) 新聞の「探求性」

「どちらともいえず」が、岡山理大生、京都の私大生、新聞協会調査ともに20%前後にまとまっていたが、京都の私大生では、「そう思う」が68.0%に跳ね上がり「そうは思わない」は4.0%、テレビとの比較で新聞の重要な役割の一つにあげられている「事実を深く掘り下げての報道」という使命への強い共感が見られた。岡山理大生、新聞協会調査ともに「そう思う」はそれぞれ40.9%、50.7%。逆に「そうは思わない」がそれぞれ30.1%、20.3%。岡山理大生の「そうは思わない」の高い回答は何を意味するものだろうか？

新聞閲読率の低さとテレビのニュース視聴率の予想外の高さという調査結果を考え合わせれば、「新聞は単にニュースを流すだけでよく、ニュースの背景説明など必要ない」と考えているのだろうか。

5) 新聞の「品位」

新聞の「品位」については、新聞が発行されて以来常に議論のあるところだ。欧米のように、クオリティペーパーと大衆紙のような明確な区別がないままに発達してきた日本の新聞だが、最近になっても夕刊紙やスポーツ紙だけでなく一般紙にもセンセーショナルな記事を掲載するケースも相次いでいる。

なかでも1981年に発生した「ロス疑惑事件」では、三浦和義氏に対する報道合戦は常軌を逸したともいわれており、一般紙も例外でなかった。三浦氏が名誉棄損やプライバシー侵害だとして起こした訴訟は約530件、うち判決があった200件では約8割が勝訴するなど、報道の仕方に問題を提起した。(注3)

共同通信社が流した記事が名誉棄損に問われて損害賠償を求められた訴訟では、配信記事を使用した地方の新聞社も確認を怠ったとして同じく敗訴する問題まで残した。

調査では、「品位を保っている」か、どうかについて、新聞協会調査で52.7%が「そう思う」と回答、京都の私大生も48.0%が肯定的だったが、岡山理大生は「そう思う」は16.1%と低く、「そうは思わない」は34.4%。「どちらともいえず」36.0%とともに懐疑的な姿勢を見せた。肯定的な回答が多かった京都の私大生も「そうは思わない」は24.0%で、新聞協会調査に比べてやや「品位について問題あり」との考えを示したともいえる。

6) 新聞におけるプライバシー・人権への配慮

2003年5月に「個人情報保護法案」が成立し、「人権擁護法案」もくすぶっている。集団的過熱取材(メディアスクラム)などにおける人権への侵害が問題になる中で、スキャンダルを暴かれることを嫌った政治家などとの利害が一致、「政治家」対「市民・メディア」の構図が崩れて「政治家・市民」対「メディア」との風潮が醸成される中で、成立への道を探る動きが続いている。

調査では、新聞協会調査と岡山理大生の結果が対照的なものとなった。

「プライバシーや人権に気を配っている」か、どうかを尋ねた設問で、「そう思う」が新聞協会調査では48.4%だったのに対して、岡山理大生は19.9%。逆に新聞協会調査では18.9%、岡山理大生40.9%が「そうは思わない」と回答した。岡山理大生が新聞に対して配慮のなさを強く感じている結果だが、両調査の間には2年の開きがある。この2年間は和歌山カレー事件における過熱取材や大阪教育大付属池田小学校の児童殺傷事件などで、これらの問題が大きく取り上げられてメディアへの風当たりが強まった時でもあり、影響がなかったとはいえないだろう。この両調査の間で行った京都の私大生は「そう思う」と「そうは思わない」が28.0%と24.0%となって拮抗、「どちらともいえず」「わからない」も28.0%と20.0%で、メディアへの批判の高まりの中で、揺れ動いている状況を示しているように思う。

7) 新聞の「情報量」

京都の私大生、新聞協会調査ともに「そう思う」が60%を超えて、肯定的な回答となった。「そうは思わない」も京都の私大生では8.0%。満足しているように思えるが、岡山理大生になると少し違った傾向になる。48.4%が「そう思う」と答え、「そうは思わない」も16.1%とまずまずの肯定的な結果だが、

「どちらともいえない」が31.2%あり、「十分な情報を提供」しているかどうかになると、少し躊躇が見られる。

細かなニュースに必要な情報と見るか、関心のあるニュースとは何か、テレビが伝えたニュース項目などによって「情報量」の考え方が違って来るだろうが、同じ世代の岡山理大生と京都の私大生の開きについては地域性が絡んでいるのかどうか、など追跡が必要だろう。

4 まとめ

調査でまず注目せざるをえなかったのが、新聞閲読時間の短さだった。昨年の京都の私大生での調査で20分近い結果が出て、これからの社会を担う若い人たち、特に学生に対してやや安堵したものだが、岡山理大生の10.2分には少々とまどった。

「どの面を読むか」との調査では、1面から始まってほぼ全ページに目を通して見ている様子が見える。ならば、10分では、記事を読むどころか見出しを見ているだけということにならないだろうか。講義で、「時間がなければ日々見出しだけでも読む習慣を」と話してきたが、それは、「見出しを見て、興味を持つ記事に出会い、次第に中身を読んでほしい」との願いを込めたものだったが、調査以後にこの願いが通じていることを期待したい。

また「読まない」が4割近いのはもっと深刻な問題だろう。「下宿だからとっていないので読まない」ならば、図書館に足を向けさせるなど、新聞に接触させる工夫が必要だろう。新聞社も若者の活字離れに悩んでいるようだが、これを機会に各社画一の紙面から脱した“魅力ある紙面”への一層の努力を訴えたい。

新聞の代わりにテレビへの接触度は岡山理大生が高い。1日5時間以上もテレビを見ている学生が多いのも特徴の一つ。「見る番組」では「ニュース」が比較的多く、その意味で「その日のニュースには遅れをとっていない」ともいえ、実際に調査でそのようなコメントもあったが、新聞閲読からくるもう一つの大切な要素「活字離れが進む」ことが忘れられている。

岡山理大生だけでなく京都の私大生も同じだったが、このような小さな調査でも誤字、脱字は数多く、間違いと気付かないまま、いわば“堂々”と書いている。活字を見るのは携帯電話やパソコンの中だけ。それも変換ミスがあっても気付かず、ミスした活字を正解と思っているだけに、大きな問題だろう。

講義で、ミスが多い漢字をいくつか黒板に書いて注意を喚起してみたが、その直後のレポートでも同じミスが散見された。何をかいわんや、である。

1871年に日本に初の日刊紙がお目見えして以来、ある時は政府と対峙し、ある時は支援に回ってきた新聞はいま大きな転機に立っている。1925年にラジオ放送が始まって、また第二次大戦後に民間放送が参入して放送が拡大しても、「新聞が生活に占める位置」は変らなかった。しかしテレビ放送が始まり、さらにインターネットなどの登場でその地位は揺らぎ始めて来た。1972年に佐藤栄作首相が辞任する時、会見の場から新聞記者を排除してテレビカメラのみに向かって話したのは有名な出来事だ。現在の小泉純一郎首相も、毎日、テレビカメラを前にした会見を行っている。パフォーマンスが重視されるようになって、テレビを重視する政治家などが増加しており、新聞離れにつながるひとつの現象かと気になる。

新聞は逆に問題を数多く抱え込むことになった。新聞だけの問題ではないのだが、新聞記者室の是非から集団的過熱取材（メディアスクラム）、実名報道などにおける人権問題、個人情報保護問題など、取り巻く情勢は厳しい。記事における速報性はテレビなどの放送に一步譲り、社会的なニュースや話題の詳細な内容は週刊誌に譲る。日本の新聞を支えてきた戸別配達制度も揺らぎ始めている。

新聞以上に若者の興味から離れてきているラジオ放送は、FM放送に見られるように地域での生き残りの場を見つけ始めているが、日本の新聞が欧米のように地方紙主流となるには、いくつもの難しいハードルを超えねばならず現実的ではないといえるだろう。

岡山市は人口63万人。人口が100万人を超える大都市でもない代わりに地方都市でもない。発展しつつある中核市として、さらに市内に6つの大学を抱え、若者が多い都市でもある。中核市の動向は日本の将来像をも方向付ける。どのようなビジョンを描いていくのか、これからの都市づくり、社会づくりの中心になる彼らの考え方は非常に興味深いものといえよう。

メディアへの接触度を通してその実態を探ってみたのが本稿だが、結果として大きな課題を背負ったように思い始めた。調査の対象を岡山理大生に限ったために岡山市の若者の考え方すべてでないかもしれないが、比較対象にした京都の私大生との考え方との相似と相違、日本新聞協会調査から見る一般的な考え方との比

較などから、結果は、岡山市という中核市の若者の考え方とさほどかけ離れているとはいえないのではないだろうか、と思っている。今後、さらに幅広い職域や年齢層の調査が必要だろう。調査を継続して、メディアと若者の動向を探っていくことが必要になる。

(注1)「新聞研究」1997年 9月号(日本新聞協会) 「第12回全国新聞信頼度調査」 41頁

(注2)「日本マス・コミュニケーション史 [増補]」山本文雄編著(1996年 東海大学出版会) 367頁

(注3)毎日新聞2003年3月7日朝刊

主な参考文献

「新聞研究」 1993年10月号 「第10回全国新聞信頼度調査」 日本新聞協会
 1995年10月号 「第11回全国新聞信頼度調査」 日本新聞協会
 1997年 9月号 「第12回全国新聞信頼度調査」 日本新聞協会
 1999年12月号 「第1回新聞の評価に関する読者調査」 日本新聞協会
 2001年12月号 「第2回新聞の評価に関する読者調査」 日本新聞協会
 「日本マス・コミュニケーション史 [増補]」 山本文雄編著 1996年 東海大学出版会
 「20世紀年表」 1997年 毎日新聞社
 「放送の20世紀」 NHK放送文化研究所監修 2002年 NHK出版
 「新聞は生き残れるか」 中馬清福著 2003年 岩波新書
 「テレビの21世紀」 岡村黎明著 2003年 岩波新書

[補足資料]

補表1 岡山理科大学生における新聞の閲読傾向 (学部による比較)

総合情報学部	1 面	国際面	経済面	社会面	運動面	家庭面	文化面	解説面
最初に読む面は?	62.7	2.5	0.8	3.4	27.1	0.8	2.5	0.0
どの順位で読む?	24.5	12.4	9.5	15.1	17.7	5.1	7.9	7.8
毎日読む面は?	19.4	13.3	11.2	15.1	15.8	7.9	9.5	7.7
工 学 部								
最初に読む面は?	57.9	0.0	5.3	5.3	31.6	0.0	0.0	0.0
どの順位で読む?	28.6	18.1	5.8	10.5	24.7	4.0	6.5	1.9
毎日読む面は?	25.8	18.2	6.1	12.1	22.7	4.5	7.6	3.0
理 学 部								
最初に読む面は?	61.9	0.0	2.4	4.8	28.6	0.0	0.0	2.4
どの順位で読む?	29.2	14.0	8.5	15.5	19.6	5.3	4.7	3.2
毎日読む面は?	23.3	15.6	9.4	15.0	17.8	7.8	5.6	5.6

*単位 %

*①最初に読む面は?・・・新聞を読む時に最初に読むと答えた紙面を1ポイントとして、各面の回答数を取り上げて集計(補表2、補表3のテレビはまず見る番組、ラジオは聴く番組への回答数を集計)。各面、番組の重要度を比較した。

*②どの順位で読む?・・・①の紙面で読む順位にしたがってポイントをつけてそれぞれを集計(補表2、補表3テレビはよく見る番組に順位を、ラジオはよく聴く番組に順位をつけてもらった。新聞は最初に読む面が8ポイント、2位が7ポイント・・・8位1ポイント、テレビは1位9ポイント・・・9位1ポイント、ラジオは1位6ポイント・・・6位1ポイント、読んだり見たりしない紙面、番組などは0ポイント)。各面、番組の人気度を比較した。

*③毎日読む面は?・・・新聞を読むときにはいつも目をとおす紙面。回答のあった面を集計後、「読まず」を除いて各面ごとの接触度を比較した(補表2、補表3テレビは見る番組への、ラジオは聴く番組への回答数をそれぞれ集計)。

補表2 岡山理科大学におけるテレビの視聴傾向（学部による比較）

総合情報学部	ニュース	ドキュメント	トーク	スポーツ	ワイドショー	映画	ドラマ	音楽	バラエティ
最初に見る番組は？	25.7	0.5	4.4	17.5	1.6	6.6	11.5	6.0	26.2
よく見る番組の順位	16.5	6.1	8.6	11.4	7.3	9.8	12.1	13.0	15.1
毎日見る番組は？	14.1	8.1	10.0	10.6	9.4	11.4	11.3	12.3	12.9
工 学 部									
最初に見る番組は？	17.1	0.0	5.7	22.9	0.0	8.6	5.7	2.9	37.1
よく見る番組の順位	14.6	5.0	10.5	12.5	6.5	11.8	11.7	11.7	15.7
毎日見る番組は？	13.1	7.9	11.1	11.1	9.5	11.9	10.7	11.5	13.1
理 学 部									
最初に見る番組は？	19.5	0.0	1.1	11.5	2.3	1.1	27.6	5.7	31.0
よく見る番組の順位	15.1	4.1	8.8	12.2	7.2	8.6	13.9	14.1	16.0
毎日見る番組は？	14.0	7.0	10.2	11.8	9.4	10.4	11.8	12.5	13.0

補表3 岡山理科大学におけるラジオの聴取傾向（学部による比較）

総合情報学部	ニュース	ドキュメント	トーク	スポーツ	音楽	バラエティ
最初に聴く番組は？	13.7	0.0	11.8	15.7	45.1	13.7
よく聴く番組の順位	15.6	3.1	20.2	13.3	33.6	14.2
毎日聴く番組は？	17.0	5.7	19.1	13.5	30.5	14.2
工 学 部						
最初に聴く番組は？	11.1	0.0	11.1	22.2	44.4	11.1
よく聴く番組の順位	11.7	0.7	22.6	5.8	34.3	24.8
毎日聴く番組は？	13.3	3.3	23.3	6.7	30.0	23.3
理 学 部						
最初に聴く番組は？	0.0	0.0	16.7	16.7	50.0	16.7
よく聴く番組の順位	13.6	3.0	14.4	15.9	37.1	15.9
毎日聴く番組は？	14.8	7.4	14.8	14.8	33.3	14.8

The paper reader rating , audience rating and the reliability of the press

— From the survey for the students of
Okayama University of Science —

Kunihiko KIMURA

Department of Socio-Information, Faculty of Informatics

Okayama University of Science

Ridai-cho 1-1, Okayama 700-0005, Japan

(Received November 7, 2003)

It is said newspaper readership are decreasing recently and it is remarkable in the youth. That's serious problem. Through reading papers or books, people can learn Japanese and KANZI.

Taking occasion to lecture on the media for the students of Okayama University of Science and private college in Kyoto, I had a statistical survey on paper reader rating, audience rating and the reliability of the press. I compared those results of surveys with the nation-wide one of Nihon Shinbun Kyokai(The Japan Newspaper Publishers & Editors Association).

Okayama-city isn't metropolis but is making progress now. I think the youth in this city would be the model. But, most of them didn't read papers; instead they saw TV for a long time. I thought the change of the consciousness in some way is need.